

森は杜(神社の森)を意味している場合がある。  
(1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名)

2. もりやま〈五城目町・八郎潟町〉

杜山・盛飯山・森医山とも書く。南秋田郡五城目町町と八郎潟町との境となる山。標高325.4m、山体は普通輝石含有黒雲母・角閃石石英安山岩からなる。湖東平野全域から望見できる。森山の岩石は古くから石材として利用された。山麓は五城目町営自然公園として整備され、付近一帯はスズムシ群生北限として県の天然記念物に指定されている。

(1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県)

3. もりやまこうえん 森山公園〈五城目町〉

南秋田郡五城目町西部八郎潟湖東の山地公園。地域は八郎潟町寄りの標高325mの山地であるが、頂上から東に出羽山地の連山、西に八郎潟から寒風山の眺望が開ける。国鉄奥羽本線八郎潟駅より東方4km。現在山頂まで車で登れる。山の西側斜面の採石による自然破壊は、森山を守ろうとする町民の運動によって中止となり、昭和47年から町は公園事業を開始、頂上までの自動車道・林間歩道・広場・キャンプ場・バンガロー(10棟)・駐車場を完備、スギ・松・ツツジなど700本を植樹した。またスズムシの生息北限地としても有名。昭和52年の新観光秋田三十景の第6位。

(1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県)

ので、人々は夜叉袋といって恐れたが、年々浅くなって、遂に陸地になってしまっただけからは奇怪なことがぱったりと止んだ。この陸地を人々は夜叉袋とよんだ。

(八郎潟町史 相馬勘治郎談)

2. やしゃふくろ

源予州公(大河兼任)がある年の1月、兵を率いて南進中に三倉鼻の陰を避けて、鹿渡の南岸から湖水を渡った。この日は朝から南風が激しく曇りの降る悪天候であった。一行が馬場目川の河口の三枚橋沖にさしかかった時に、氷が突然割れて多くの兵が溺れ死んだ。予州公もびしょぬれながら一向堂村に着き一泊した。翌朝、生き残りの兵を連れてどこともなく去った。その後、夜になると溺死者の霊火が永年燃え続けた。溺死者が出た所は深くなり、葦や真菰も生えなく、漁師達も恐れて近づかなくなり、この深い所を夜叉袋と呼んだのが、いつしか村の呼び名になった。江戸時代には村の呼び名になった。

(八郎潟町史 須田源蔵談)

3. やしゃふくろ

夜叉袋は戦国期から見える村名で野舎箇岱・夜砂が岱なども書かれた。岱は異字体で、古文書は袋をほとんどこの字で書いた。夜叉袋は珍しい地名である。夜叉はインドの鬼神で仏佛護持の神である。

(八郎潟町広報 畠山四郎  
地名と歴史 3 ふるさと散歩 107)

4. やしゃふくろ

夜叉袋あたりは、五十ノ目浜・磯見浜と呼ばれ、五城目と密接な関係があった。南北朝の暦応元年(1338)この浜に関西芦屋のカマ師金屋(どや)五郎左衛門が門人 藤原国広とやってきた。金屋は近江中村の人で、二代芦屋カマ師になるべき人物だったが、文和元年(1352)10月3日、70余歳で、夜叉袋没。国広は八万岱(八幡岱?)で胴屋座を開き、元中2年(1385)10月9日(富津内円通寺記録)没。藤

\*\*\*\*\* ヤ 行 \*\*\*\*\*

やしゃふくろ

八郎潟町 字 <sup>やしゃふくろ</sup>夜叉袋  
1. やしゃふくろ

昔、多くの人々が遭難したことがあった。春になっても死体が上がらない。夜毎霊火が燃え、永年燃え続ける。その辺を舟が通れば必ず異変が起きる